



「実現可能な気候変動対策  
—政策・経済・技術・エネルギーのバランス—」

山口光恒 監訳

丸善出版, 2013年3月

293頁, 6800円 (本体価格)

ISBN 978-4-621-08657-5

世界の気候変動 (地球温暖化) 対策は, 2012年に京都議定書の第一約束期間を終えた後, 多くの国が拘束力のある目標を持たない空白的な状況となっている。2010年にカンクンで行われた COP16において, 産業化以前からの世界平均気温の上昇を 2°C 以内に抑制する目標 (2°C 目標) が掲げられたが, 現状の各国の対策目標を積み上げても 2°C を大きく超えてしまうというギャップが指摘されている。日本においては, 2011年の東日本大震災に伴う福島第一原発事故以降, 原発停止の影響で CO<sub>2</sub> 排出量が増加している。

そのような中で出版された本書は, 世界及び日本が今後の気候変動対策目標を改めて考え, その達成を目指す上で必要な事柄を多面的に論じている。本書は同じ著者たちが 2012年7月に Springer から英語で出版した本 (Climate Change Mitigation —A Balanced Approach to Climate Change) を日本の読者向けに邦訳したものだ。監訳者であり, 内容の執筆においても中心的な役割を果たした山口光恒氏は, 保険会社に長く勤め, 現在は東京大学客員教授と地球環境産業技術研究機構 (RITE) 参与を務める。気候変動に関する政府間パネル (IPCC) の第3作業部会報告書執筆者などとして国際的にも活躍する人物だ。執筆には山口氏のほか, 国内の大学, 研究所, 企業等から各分野の専門家9名が参加している。

全部で11章から成る本書の内容は多岐にわたる。このうち, 4章 (エネルギー安全保障), 5章 (緩和コスト), 6章 (適応策), 8章 (エネルギー効率向上ポテンシャルと障壁) は, 比較的癖の無い解説として読めた。9章は鉄鋼と自動車を例にとった技術の話題であるが, 自動車の話の一部 (9.2.1節) は企業からのゲストに経験を語ってもらったものとして読むとしくりくる。10章では福島事故以降の日本の状況を論じており, 一部が日本語版で加筆されている。

本書の主張が特によく表れているのは2章と3章で

ある。そこでの中心的な概念は「縦のバランス」と「横のバランス」だ。縦のバランスとは, 気候変動対策による便益 (対策によって回避される悪影響) と対策コストの間のバランスを考えるということである。一方, 横のバランスは, 気候変動以外の社会問題の対策への投資と気候変動対策への投資のバランスを考えるということである。つまり, 気候変動対策はやればやるほどよいというものではなく, 過剰な対策は社会全体での非効率をもたらすので注意すべきというメッセージだ。この観点に立つと, 国際交渉で掲げられている前述の 2°C 目標はコストがかかりすぎるので, 本気で目指すべきではないという結論に至る。さらに, 7章では同様の観点からトップダウンの政策手法の問題点を指摘し, 11章では「IPCC が 2°C 目標を推奨したことはない」点を念押ししている。

このような主張は, 「2°C 目標を目指して野心的な対策をすべきだ」という考えの人からみると, 「できない理由」を並べたててけしからんと映るかもしれない。しかし, 評者の印象としては, これらの「できない理由」にはとても説得力がある。縦横のバランスは経済学の費用便益分析の考え方に基づくものであり, 公共政策を評価する際の基本だ。分析には RITE 等による独自の研究成果を盛り込んでいるが, 多くの主要な専門家の文献も参照している。費用便益分析には限界もあるが, そのこともよく意識され, 明示されている。

では, 本書の議論に「死角」は無いのか。もしあるとすれば, 本書が基本的に現状の製造業やエネルギー産業の利益を維持することを大前提に議論していることではないかと評者には映る。この文脈の中では, 技術革新は既存産業の中での効率改善をもたらすものとしてのみ語られ, 産業のあり方自体を大きく変える可能性としては語られにくい。たとえば, いかにか CO<sub>2</sub> を出さない自動車を売るかが語られるが, いかにか自動車を売らずに人々の欲求を満たすかは語られにくい (ただし, 本書の 9.2.3, 9.2.4 節では, 例外的に大胆に交通システムの未来が語られている印象を受けた)。この認識に立てば, 議論はさらに膨らみをみせるのではないだろうか。

いずれにせよ, 本書は「もっと野心的な対策をすべきだ」と考えている「理想派」にこそ読んで欲しい。そして, 本書で語られている現実を踏まえ, それを超える議論を展開して欲しい。そのことで, 「理想派」と「現実派」が互いにさらなる理論武装を固めて相容

れない主張を繰り返すのではなく、立場の違いを超えた本質的な議論を発展させることを祈りたい。

(国立環境研究所 江守正多)

---